菅生中学校区地域教育会議ニューズレター（55）

# とらいあんぐる菅生

２０１２年６月２６日（火）
発　行：菅生中学校区地域教育会議
編　集：情　報　委　員　会
当番校：稗原小学校　TEL：976-4557
事務局：菅生こども文化センター
http://sugaochikyou.web.fc2.com　E-mail:toraianguru@mx81.tiki.ne.jp　TEL&FAX 976-0444

## 祝 菅生分館 25周年

４月２１日、菅生分館２５周年を祝うつどいが開催され、８４名の方たちの参加をいただきました。菅生分館は旧菅生小学校分校舎のプレハブ教室を利用した菅生分室を粘り強い地域の皆さんの運動で新たに建て替えられ、昭和 62 年 4 月に開館しました。

つどいでは初めに手嶋佳津子弦楽四重奏団とすてきな演奏と南菅生保育園の子どもたちの歌声をお楽しみいただき、その後参加された皆さんの菅生分館への思いをお話しいただきました。続いて藤岡貞彦一橋大学名誉教授の記念講演「菅生分館が提起し続けたことは」を伺い、最後に参加者皆さんでティーパーティーを楽しみました。

なお、当日昨年の震災で被災した東北の公民館再建への募金のお願いしたところ 27118 円のご協力をいただきました。ありがとうございました。

## 「菅生分館」25周年を祝うつどいを終えて

**実行委員長　友　納　　緑**

4月 21 日（土）分館 25 周年を祝うつどいが開かれました。決して立派とは言えない分館の建物がきれいに磨かれて、随所にお花が飾られて見違えるばかり・・・・・。

12 時を過ぎると、日頃分館を利用している人たちばかりでなく、近隣の方々が三々五々集まってこられ、この日のために用意されたグループ紹介の展示を見てくださいました。

12 時 20 分から手嶋佳津子弦楽四重奏団の妙なるクラシック演奏で開会。長くこの地に住んでいる私も、お近くにこのような方々がおられることさえ知らず、本当に良い時間でした。引き続いて近くの南菅生保育園のお子さんたちが保育士さんと一緒に澄んだ声で歌ってくださり、普段小さい人たちと接するチャンスの少ない私は、すっかり聞きほれてしまいました。

13 時 40 分から「菅生分館が提起し続けたことは」と題する講演会。講師は一橋大学名誉教授の藤岡貞彦先生。先生には分館開館以前からいろいろアドバイスをいただき、勉強させていただきました。なかでも「いつも今日的な問題から目をそむけず。考え深い生活を心掛けるように」との言葉は心に沁みました。

講演終了後はティーパーティー、おいしいお茶とお菓子をいただきながら歓談。殊に旧職員の方々や、創立当時お世話になりその後疎遠だった懐かしい方々にお会いできたことは思いがけぬ喜びでした。

なお、当日参加した人たちに「伝えよう 市民の力」と題する小冊子が配られました。その中には「分館」を熱望して集まった人々の今の思いに始まって、現在利用している各グループの方々の思い、さらにはこの 25 年の分館の歩みが盛り込まれています。

昭和 30 年代末、造成されたばかりの「蔵敷団地」に居を構えて半世紀、私の「学ぶ」機会は常に分館と共にありました。電車賃もいらず、普段着で行けるところに「学ぶ場所を」という切なる思いだけで進めた「菅生分室を盛り上げる会」の動き、そしてその結果生まれた私たちの「分館」です。

いま、分館は過渡期を迎えており、利用する人々の顔ぶれも、利用の仕方も変わってきているように感じます。しかし、当初、私たちが志した「地域施設」としての役割を引き継ぎ、老若男女相集い、盛り上がりを見せていくことを願ってやみません。

## 25周年を祝うつどい記念講演(要旨)

一橋大学名誉教授

# 藤岡貞彦氏

# 横浜から菅生の皆さんへ

私は毎朝、平原綾香さんの「おひさま」のCDを聞いています。その中の一節「あなたは私の奇跡」「あなたは私の希望」が大好きだからです。この日本のどこに「奇跡」があり、どこに「希望」があるといえるのでしょう。

今、日本の各地では、社会教育の世界に合理化の嵐が吹きあれ、統合と縮小が強制され、「住民参加」の名目で指定管理者制度が強行され、「冬の時代」といわれています。ここ菅生では春の祭典が盛大に行われています。つまり「奇跡」です。菅生は「私の奇跡」菅生は「私の希望」です。「おおげさ？」「いいえ」。

菅生では住民の中に「分館」が生きています。多くの参加者が男性女性の区別なく集まっています。企画もすばらしい。一つ一つの企画が長続きしています。おもしろいからです。このごろは住民自身が講師となっているというではありませんか。住民に最も近い「分館」でです。菅生は私の「奇跡」、菅生は私の「希望」です。

日本の社会教育が冬の時代にどうして菅生分館は「花ざかり」なのでしょう。その秘密はただ一つ、「皆さんが作った公民館」だからです。「市役所」も「学校」も「病院」も何もかもお上の作ったものです。ここだけが住民の作った「公共の建物」です。公民館行事も「住民の手で」「住民の目で」「住民の評価で」運営されているのです。菅生分館は公共のものですが、皆さんのものでもあり、皆さんの意思でここにあるのです。

私の住む横浜市中区には社会教育施設は一つもなく、社会教育専門職員もおりません。「奇跡」も「希望」もあるはずがありません。考えると「菅生」は一つのムラであり、あたたかい「共同体」です。

今後の都市経営で一番の問題は「防災」と「老人の「孤独死」の防止」でしょう。危機の時、「桃源郷」と「ヨコハマ砂漠」の違いがはっきりとあらわれるでしょう。皆さんは倖せです。人間の絆こそが「地震」や「災害」の防壁だからです。

もちろん横浜市民も私も心ある人はかならず学習しています。例えば私の場合、家から10分ほどの集会場に集まって学習しています。そのテーマを申しあげてみましょう。①「TPP」問題　②「横浜市の教科書問題」　③「沖縄の現状」　④「福島の原発事故」　⑤「原爆と原発」　⑥「横浜市教育委員会」。堅苦しい,実際の生活から縁遠い、少数の人だけのお勉強と思わないでください。「防災」にしても「税金」にしてもつい最近まで遠い問題でした。今は、誰にも身近です。一見遠い他人ごとが、アットという間に地域住民全ての人の生死にかかわってくる経験を、私たちは昨年３月11日以降に味わったのです。

あたたかい菅生学習ムラの外側にある「日本の抱えた深刻な問題」を考えてみるキッカケを作っていただきたい、そこで最後に、教育学者であり、６人の孫の祖父の立場から「日本の教育」を考える講座の提案をいたします。

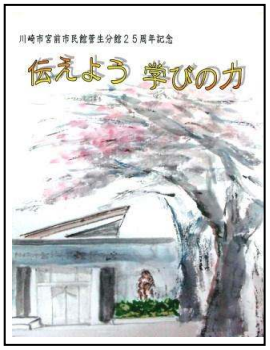
藤岡貞彦（一橋大学名誉教授）

＊　**その後、藤岡先生とご相談をして、現在、１２～１月の土曜午後に「地域での子どもたちの未来をはぐくむ「教育」にかかわる努力を過去・現在・未来とつなげて、市民がともに「教育」を考える機会」となる家庭・地域教育学級の準備を進めています。**

## 25周年記念誌「伝えよう　学びの力」

記念事業に合わせて記念誌が発行されています。表紙の印刷を除いて、印刷、製本とすべて手作りのもの。表紙のデザインは、津久井勝美さん。表紙には宮前区の木、桜が咲き、裏表紙には宮前区のシンボルマークを水盤に見立て区の花コスマスが揺れています。

菅生らしいみんなの力による手作りの冊子です。




残部が多少ございます。

無料でお分けしています。
ご入用の方は、菅生分館にお問い合わせ下さい。

TEL044-977-4781まで

# 平成24年度
# 新任の校長先生・教頭先生のご紹介

平成 24 年度、菅生小学校校長先生、菅生中学校教頭先生、稗原小学校教頭先生が新しく着任されました。それぞれの先生方から抱負を寄稿していただきました。皆さん、それぞれ菅生の自然に地域性を見出し、子どもたちの豊かな成長を期待されています。

菅生小学校校長　玉 井 弘 孝 先生

平瀬川を中心に緑豊かな環境の菅生小学校に赴任できて嬉しく思います。身近にこれだけ素敵な自然環境があること、そして地域の方々が未来の子ども達のために自然を保存し、豊かな生活をさらに向上さようと努力していることに感銘を受けました。

さて、学校は子どもにとって安心して伸び伸びと生活できる場です。子どもたちがその時々に応じた、その子らしい成長を保障され、今育てられるべき力が、確かに育てられなければなりません。今でなければ培われないであろう感性が、豊かに培われ、子どもたちが子どもである今をより豊かなものにする必要があると考えています。また、教職員が子どもとともに学び、各自の良さを発揮する中で、地域の方々のご支援ご協力をいただきながら、生き生きとした学校づくりをめざしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

４月に川崎中学校より転任してまいりました髙橋敏昭です。バスで学校へ向かう途中、野菜畑や竹林があり、平瀬川のせせらぎが心を落ち着かせ、自然豊かで生活環境のとてもすばらしい地域と感じています。

菅生中学校は「子どもたちの豊かな心を育み、教育指導の充実に努め、開かれた学校づくり」をめざしています。開かれた学校づくりでは、地域教育会議、菅生懇話会、ＰＴＡや地域の皆様の協力のもと教育活動を進めています。４月下旬に行われたプラス１学習では、ボランティアの先生方が数学と英語を丁寧に教えていただきました。また、平瀬川桜祭りでは、吹奏楽部が開会の演奏をしました。このように、地域の人材活用と地域活動への参加、地域の人との交流を大切にしながら教育活動を進めてくことを重点に、１年間取り組んで行きたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

菅生中学校教頭　髙 橋 敏 昭 先生

稗原小学校教頭　大 治 茂 雄 先生

紫陽花が色鮮やかに咲く季節となりました。私は、多摩区の西菅小学校から転任してまいりました大治茂雄と申します。菅生地区や稗原小学校は、自然に恵まれた環境と地域の皆様や保護者の協力がとても素晴らしい学校と聞いております。

着任して何より驚いたのは、子どもたちが、「おはようございます。」「さようなら。」と挨拶が元気にできることや、私にもいろいろと声をかけてくれることです。元気で明るい子どもたちと一緒に勉強できるのをとても嬉しく思っております。また、地域の皆様の協力による安全パトロールや児童の見守り、花やサツマイモの栽培、環境整備とさまざまなご協力をいただき感謝しております。

これから児童一人ひとりが安心して成長できるように、保護者や地域の皆様と手を取り合って、稗原小学校・地域のために力を尽くしてまいりたいと思います。何かございましたら、遠慮なく声をかけてください。どうぞよろしくお願いいたします。

## 道親ネットワーク

# 北村年子先生をお招きし、シンポジウムを実施

去る５月１９日(土)、道で出会った子も自分の子と同じように心配していますという「道親」という言葉の提唱者でもある、ルポライター北村年子先生をお招きし、菅生中学校区地域教育会議特別委員会「道親ネットワーク」・NPO 法人あかい屋根と共催でシンポジウムを開催しました。

パネリストは、菅生台自治会長・山岸秀男氏、稗原小学校父の会パワーズ・弦巻達也氏、菅生こども文化センター・針山直幸氏の３名。それぞれ現状と課題が報告されました。

その後、北村先生の基調講演があり、次のようなお話がありました。

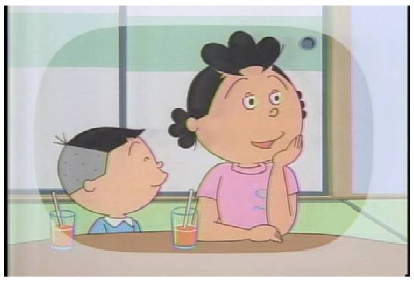
■シルバー世代の出番です

＜サザエさんの家族・町を目指して＞

菅生という地域はとても素晴らしいと感じています。菅生台自治会にとどまらず、多くの自治会がこぞって子どもたちの登下校の見守りをなさっていることに敬意を表したいと思います。ただでさえ忙しい自治会が当番制とはいえ、毎日子どもたちを見守っていることは、まさに道親の一環と言えるでしょう。

もう 100%以上の力を発揮していただいているのを承知の上で申し上げますが、様々なサークルをなさっているようなので、そのサークルの一つとして「子育てグループ」のようなものは考えられないでしょうか？　私が行っている子育てグループは、必ず母子分離をしています。昔は、大家族制で母親だけが子育てするのではなく、誰かが子どもを見てくれて、母親とだけで過ごすことはありませんでした。

サザエさんの家族を思い出してください。サザエさんの子どもはタラちゃん。タラちゃんは、お舟さんや波平さんに甘え、カツオ君やワカメちゃんが適当に面倒を見てくれている。タラちゃんが一人で町へ出ても誰かが「あらタラちゃんどうしたの？」と声をかけてくれる。だからサザエさんは安心して子育てすることができているのです。



でも、今の母親はどうでしょう。１人で子育てをしているのが現状で、子どもといつも一緒なのです。そこで、地域のシルバー世代が子どもを見てあげる時間があれば、母親はどれだけ助かるでしょう？　シルバー世代にも効果があって、私の子育てグループでは、「こんなかわいい子を抱かせてもらってありがとう」と満面の笑みで感謝の意を表されます。ぜひ、地域でこのような取り組みをなさってはいかがでしょうか。

■ありがとうと言われない子育て

皆さんは、子育てをしている母親たちにありがとうと言ったことはありますか？　皆さんの世代では母親は子育てするのが当たり前、男は外で仕事をしているのだから・・・そうした概念をもっていませんか？

今、女性は「男女平等」という考え方で育っています。男と同じように女性も競争社会で育ち、激しい就職難を突破して男と肩を並べ仕事をしてきたのです。その意味では、女性は男と同じなのです。

ところが、結婚して子どもができると、今でも女性が子育てをする。それぞれがアパートやマンションの一画で誰とも接することなく子育てをしている。子育てに自信が持てないのは、誰にも接していない、誰からも「それでいいのよ」と言われない・・・そして本来子育てに対して等分の責任を負う「ダンナ」からも「ありがとう」の感謝の言葉ももらえない。

母親たちは子育てに対しての「自尊感情」が持てないでいるのです。

自尊感情は、安心していられること、自信が持てること、そして他者から認められること、この３つがなくては育ちません。「ありのままの自分でいいんだよ」「それでいいんだよ」「ありがとう」なのです。

**編集後記**　▼菅生中学校区地域教育会議と皆様を結ぶ手段としての本紙の役割。皆さんに忘れられないよう、年に４回発行していこうと今年度の情報委員会は頑張りました。▼出来上がるまでに大変な仕事量があります。編集会議、原稿依頼、ＰＣ入力、校正、印刷、発送。最低限これだけをこなさなくてはなりません。その都度、本来なら委員会を開催しなくては・・・▼一号出すのに最低六回の集まりでは、もうヘトヘトです。そこでＰＣを多用して、編集、原稿依頼以外はメールでのやり取りによって会議数を減らし、負担を少なくしました。▼それでも青息吐息。一年間に四回出すのがやっとというのが実感です。各学校から情報委員会に選出された皆さん、本当にお疲れ様でした。今年頑張れたのは皆様のおかげです。本当にありがとうございました。（情報委員長）